

船坂 弘

英靈の絶叫

玉碎島アングウル

船坂 弘

英靈の絶叫

玉碎島アングウル

文藝春秋刊

英靈の絶叫——玉碎島アングウル

著者略歴——大正九年楠木果生。
昭和十五年満蒙学校卒、十六年満
洲二一九部隊入隊、十九年中部太
平洋に参戦、二十一年復員後書店
経営に当り現在大盛堂書店社長。
他に南太平洋慰靈協合理事、全日
本銃剣道連盟参予、東京都ユース
ホステル協合理事など数団体に関
係している。剣道五段、居合道練
士、銃剣道練士、大盛堂道場館主

昭和四十一年十二月十日 第一刷

定価 三六〇円

著者 舩坂弘 ふなさか ひろし

発行者 上林吾郎

発行者 株式會社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
印刷 大日本印刷
製本 加藤製本

万一落丁乱丁の際は、お買求の書店
又は発行所にてお取替えします。

目次

序	三島由紀夫	二
二〇倍の敵上陸す		九
複廓陣地の死闘		五三
司令部天幕突入計画		一二七
収容所での闘魂		一五八
英霊の絶叫		一八六
あとがき		一九八

序

三島由紀夫

(原文のまま)

船坂弘氏は私の剣道の先輩である。先輩と云つたつて、ろくに後輩のゐない私の剣道歴から云へば、無数の先輩の中の一人といふことができよう。それだけのことなら、道場で教へを乞ひ、稽古をつけてもらふ仲にすぎないが、あるとき船坂氏が大部の生原稿を道場へ持つて来て、閲讀を促されたのはおどろいた。

それまで私は、船坂氏を日本屈指の大書店の経営者で、熱心な剣道家で、店の若い人たちをまで剣道に引きずり込み、又、それだけの信望を克ち得てゐる人だとは知つてをり、堂々たる風格の稽古で、圧倒された覚えは数あるけれども、氏自らが忙しい業務のあひだに筆を執る人だとは知らなかった。

しかし以前から私が、氏の重戦車のやうな体軀にひそむ鬱屈、そのきはめて慰懃謙讓な態度の裏にひらめく負けじ魂、その生真面目さと表裏した粘着力、その闘志とバランスのとれたブラクティカルな精神、その平静さに隠れた一種の悲しみ、その爆発力を制してゐる抑圧、……これらさまざまの対蹠的なものを藏した肖像画の裏側に、遠い哨煙の匂ひをかぎつけてゐたことは確かだった。そこには必ず、戦争の影がひそんでゐなければならなかった。

若い人たちだけを相手にするスポーツの世界では、今日もはや、彼らの顔の裏側に戦争の影を讀むことはない。もちろん戦争に対する怯えや不安を讀むことはあるけれども。

又、文壇の人たちは、その戦争体験のすべてをすでに作品に肉化してゐて、戦争の影を暗く背後に揺曳させてゐる人に会ふことはない。それに第一、文壇のいはゆる戦争文学は、兵士不適格者によって書かれたものが多いのである。

剣道のやうな年長者の多い運動で、しかも一種の精神主義的な郷愁を湛へた世界では、今は成功した社会人としての面貌のかけに、かつての「兵士適格者」の抑圧された姿が、切なく、又、無用に、閃めくの間を見ることが往々ある。私はさういふ人たちの心の中の戦争体験に、より深く秘められ、より強く抑圧された、遠い叫び声をきくことがある。その叫び声は表現の機會にめぐり会はずに、あるひは一生、その人の暗い体内を駆けずり廻つてゐるかもしれないのである。彼がじつと身を屈して、休日の朝、庭いぢりをしてゐるそのさなかにも。

果然、松坂氏の原稿は、二十年のあひだ、氏のなかを駆けずり廻つてゐたこの叫びの肉化であつた。それは小説でもなければ、文學でもなく、いはゆる記録ですらなかつた。それはただ叫びの肉化であり、生命の轟きであり、永らく閑却されてゐた或る眞実、いはば「勇猛果敢の眞実」ともいふべきものの自己証明の文字であつた。

この本のおどろくべき内容については、讀者が直に感得されるのが一番であるから、私はここでは

触れまい。

しかし、はつきり言へることは、近代戦のもつとも婆壮な様相が如実に描かれてゐる点で、又、ただ僥倖きようこうとしか思へない事情で生き永らへた証人によつて、人間の「滅盡めつじん争」 Vernichteter Kampf がはつきり描かれてゐる点で、これは世界に比類のない本だといふことである。この本は実にありえないやうな偶然（すなはち証人の生存）によつて書かれたものであるから、これ以上の文學的贅沢などを求めるのは全く無意味である。

私の貧しい感想が、この本に何一つ加へるものがないことを知りながら、次の三点について讀者の注意を促しておくことは無駄ではあるまいと思ふ。

第一は、もつとも苛烈な状況に置かれたときの人間精神の、高さと美しさの、この本が最上の証言をなしてゐることである。玉碎寸前の戦場において、自分の腕を切つてその血で戦友の渴を医やさうとし、自分の死肉を以て戦友の飢を救はうとする心、その戦友愛以上の崇高な心情が、この世にあらうとは思はれない。日本は戦争に敗れたけれども、人間精神の極限的な志向に、一つの高い階梯を加へることができたのである。

第二は、著者自身についてのことであるが、人間の生命力といふもののふしぎである。

松坂氏の生命力は、もちろん強靱な精神力に支へられてのことであるが、すべての科学的常識を超越してゐる。

あらゆる條件が氏に死を課してゐると同時に、あらゆる條件が氏に生を課してゐた。まるで氏は、神によつてこのふしぎな実験の材料に選ばれたかのやうだ。氏は、水も食もない戦場で、左大腿部裂

傷、左上膊部貫通銃創二ヶ所、頭部打撲傷、右肩捻挫、左腹部貫通銃創、さらに左頸部貫通銃創といふ致命傷を受け、一旦あきらかに戦死したのち、三日目に米軍野戦病院で蘇り、さらにペリリユー收容所で、敵機を破壊しようと闘魂を燃やす。

しかも氏が生を無視しようとすればするほど、死もあらずさりをするのである。もちろん、氏に課せられた死の條件が十であるとすれば、その條件がたとひ一であり二であった人も、一方では現実に命を失つてゆく。それは意志とも、あるひは勇氣とも関わりがない。氏の勇猛果敢が、氏の命を救つたすべての理由であつたといふわけではない。体力、精神力、知力に恵まれてゐたことが、氏を生命の岸へ呼び戻した何十パーセントの要素であつたことは疑ひがないが、のこりの何十パーセントは、氏が持つてゐたあらゆる有利な属性とも何ら関わりがないのである。それでは、ひたすら生きようとといふ意志が氏を生かしてゐたか、といふと、それも当たらない。氏は一旦、はつきりと自決の決意を固めてゐたからである。

氏が拾つた命は、神の戯れとしか云ひやうのないものであつた。その神秘に目ざめ、且つ戦後の二十年間に、その神秘に徐々に飽きてきたときに、氏の中には、自分の行為と、行為を推進した情熱とが、單なる僥倖としての生以上の何かを意味してゐたにちがひない、といふ痛切な喚起が生じた。その意味を信じなければ、現在の生命の意味も失はれるといふぎりぎりの心境にあって、この本が書き出されたとき、「本を書く」といふことも亦、一つの行為であり、生命力の一つのあらはれであるといふことに気づくとは、何といふ逆説だらう。氏はかう書いてゐる。

「彼ら（英霊）は、その報告者として私を生かしてくれたのだと感じた」

第三には、これは私自身にとっても大切な問題だが、「見る」といふことの異様な価値である。

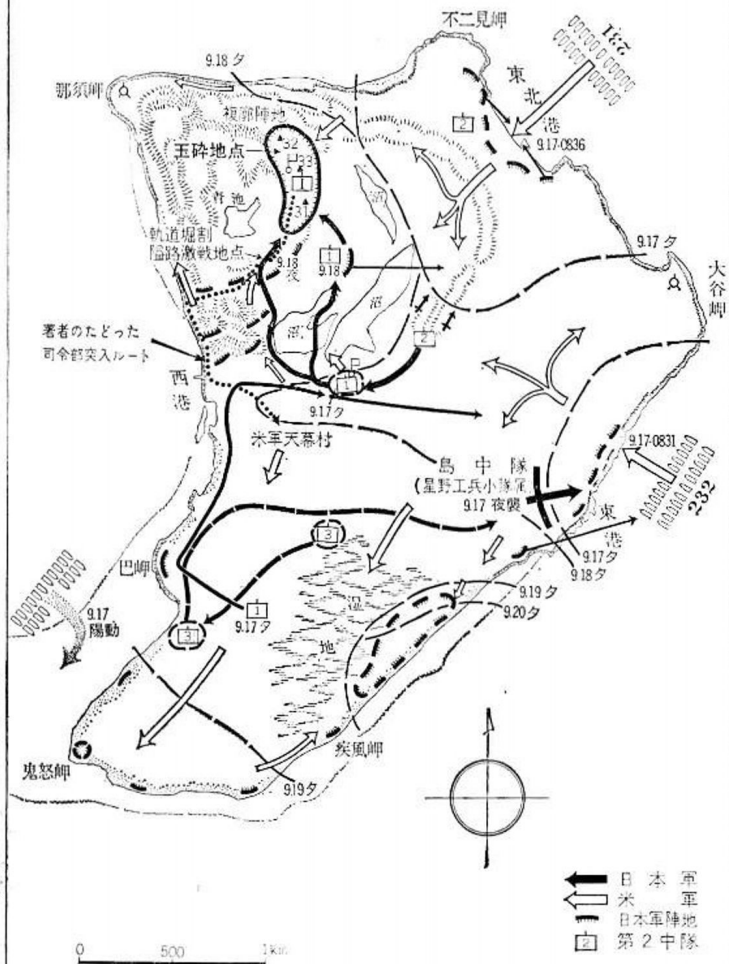
行為のさなかでも見ることをやめない人間が、お互ひに「見、見られること」を根絶しようとして戦ふのが、戦争といふものであるらしい。敵をもはや「見ること」のない存在、すなはち屍体に還元せしめようとするのが、戦ひの本質である。氏がつひに生きのびたといふことは、氏が戦ひに勝ったといふことであり、自分の目と、自分の見たものを保持したといふことである。そして氏の見たものは、他に一人も証人のみない地獄であると同時に、絶巔における人間の美であった。

そして目が見たものは、言葉でしか傳へやうがない。そこに言葉の世界がはじまり、文學の根元的な問題がはじまる。言葉が、徐々に、しのびやかに、執拗に、とどまるところを知らぬ動きをはじめるのである。……

英霊の絶叫

——玉碎島アングウル——

アンガウル島戦闘経過要図



二〇倍の敵上陸す

昭和四十年八月上旬、私はパラオ島方面慰霊派遣団の一員として、また数少ない生き残り兵の一人としてパラオ諸島の玉砕島をまわった。そのとき、私の長年の悲願であったアンガウル島にも上陸したが、歩むにつれて泣けて泣けて泣けて仕方がなかった。

戦後二十年余の星霜を経て、島は戦前のように椰子の緑に包まれていたが、米軍上陸用舟艇や日本兵の鉄帽、銃剣、迫撃砲などがそのまま錆びついて放置されており、砂浜やジャングルに生々しい戦場の跡を残していた。

だが、私を哭かせたのはそういう想い出の残骸ではない。かつての激戦地点にそのまま残る、骨、骨、骨である。あるものは鉄帽も帯剣も骸骨の上に絡み、斃れたときの儘の姿勢であった。またある骸骨は坐して日章旗を抱き、東方に向って斃れた儘であった。

奥地の鐘乳洞陣地に入るにつれ洞内は頭蓋骨、大腿骨と打ち重なり、その惨状は私に二十一年前の悲惨な光景を思い起させた。当時、洞窟内には水と食糧に苦しむ重傷者たちが蠢いていたのである。

彼らはみな「われ太平洋の防波堤たらん」と、故国の安全を祈りながら死んでいった者ばかりだ。

擲弾筒分隊前へ

——昭和十九年、九月十七日。

その夜、アングウル島の空は一点の星もなく、闇であつた。斥候の伝えてきた米兵進行地点を覗くと、双眼鏡のレンズにはただ墨をとかしたような夜があるだけであつた。

「全員決死隊となり、玉砕の覚悟を以て本島を死守せよ」

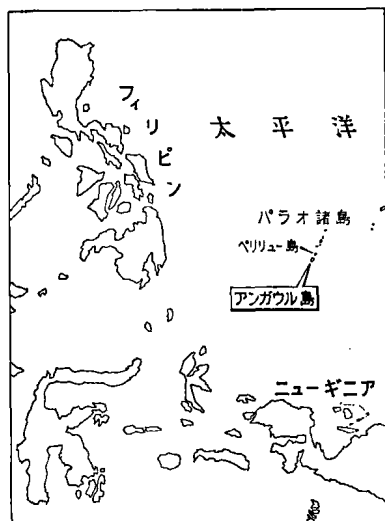
「携行食糧は一食分。余分なものは捨てて、弾薬を最大限に携行せよ」

「常に斬り込める体制にあれ。まず第一防禦線に於て米軍を撃破せよ」

矢継早に石原中隊長の伝令がとんでくる。緒戦が夜だとは思わなかつた。誰しも、かつての練兵場における演習の如く、早曉、華々しく開かれるものとばかり想像していた。隊員たちは緊張のあまり、コトリとも音を立てない。そのとき、突然、しゅるる、しゅるる……と不気味な響きとともに天空に照明弾、頭上に曳光弾が嵐のように襲いかかつてきた。闇は、一転して、真昼のような明るさとなった。その朝上陸した米軍は水際陣地を突破して、わが中隊の前面に攻撃してきたのだつた。

「松坂軍曹、擲弾筒分隊前へ！」

中隊長の命令が伝わる。蒼く照明弾の光が、周囲の光景をまばゆく照らし出す。削り取られた岩壁、白い亀裂をみせて倒れている大木、山腹にぽっかりと開いた穴。屍体。……米軍は上陸に先立って三日間、寸時も休まずこの小島に、豪雨の如き艦砲射撃を浴びせかけていた。一分間に四十発、一日五万七千六百発、計十七万二千発という物量をもって、この緑の島はまたたく間に、恰も鳥の羽をむし



られたように裸の島に化していた。地形あらたまり山形変じ、島内のジャングルは集中射撃で平坦地に変貌していたのである。

われわれ擲弾筒分隊十三人は、その惨澹たる光景の中を、隊の先頭部へと進んだ。ところが十米も歩んだとき、われわれはいきなり凄まじい爆発音に包まれた。照明弾、曳光弾にまじって、米軍は艦砲、ナバーム弾、機関銃弾など、ありとあらゆる砲弾を打ち込んだのである。バタバタと倒れる音、それをいたわる戦友の声が炸裂音のきれぎれに聞こえてくる。進もうとして思わず腰を落す者もあれば、わなわなと顫える初年兵もある。

「しつかりしろ、歌うんだ、軍歌を。いいか、心の中で歌うんだッ！」

夢中で私は叱咤したが、その声は飛来する砲弾の音にかき消された。……万葉の桜か襟の色、花は吉野に嵐吹く、大和男子と生まれなば、散兵戦の花と散れ……私は大声で歌いながら、頭をさげて前進した。歌っていたのは私独りだったのかもしれない。私自身、亢ぶる氣持を押えつけたかったのである。

道路の両側に見上げるほどに聳え立っていた椰子の樹々はどこへ飛ばされたか影も形もない。あたりに鬱蒼と茂っていた密林とともに姿を消して

いる。足もとにはずたずたに切断された電線と、鉛のように曲ったトロツコのレールが飛散しており、碎け散った椰子の木の断片が脚に絡んだ。蒼白い照明弾の光のもとで、進路に点々と落ちた血の量が増してゆく。

「だれか、……だれか……残念だー」

「てん、のう、へいか……」

呻く声。助けを求める声。一切をかき消す爆発音。

それらが一米進むごとに激しい様相を帯びてくる。

「いいか、右手が失くなったたら左手で、左手が失くなったたら右手で闘うんだ。敵の火器が百倍でも千倍でも恐れるんじゃない。敵が数十倍なら一人で数十人を斃^{たふ}せばよい。肉弾となって最期までたたかえー」

私は元気であった。士気旺盛。この日のために生まれきて、この日のために男子の本懐を、といった気持ちであった。死の恐怖は逆に私の興奮をかき立てていたのである。だが、私の絶叫が終った瞬間、不意に照明弾、砲弾の飛来がびたりと止んだ。一面青白いスポットを注がれていた戦場は一瞬にして暗黒の底に転じた。急変して不気味な静寂にかえったことが、われわれを言い知れぬ恐怖の底に迫りやる。誰もが次に、異変の襲いかかるのを予感せざるを得なかった。

へもう敵兵と接触したのだろうか。米兵は近くに姿を現わしたのか？

と、全員息をのんだ。それにしては早すぎる……。いま米兵に遭遇することは、絶対堅固と信じられていたア島東北港が壊滅したことを意味していた。島の海岸線を見ると、東北港は随一の自然の

要害であった。その断崖絶壁に打ち寄せる怒濤は高く大きく、嵐が渦巻いているかのようだった。人間も船も近づける場所ではない。島に住むカナカ族の土人でさえ、そこには船をつけなかった。いかに物量を誇る米軍であっても、この東北港だけは敬遠するだろうと、守備隊員全員が信じていたのである。従って、この東北港を守る第二中隊の安否は戦局の重要なポイントであった。

ところが、最前線の斥候が暗闇のなかを帰ってきて、「米軍の集団、前方にあり」と報告した。何故このように早く接触する羽目に陥ったか。その報告をかすかに耳にしたとき、中隊員は化石のように押し黙った。頼みとする第二中隊を押し切って、米軍は東北港の上陸に成功したことを察知したからである。実は、このとき米軍は東北港の岩壁をすさまじい砲撃によって次第に削り取り、断崖を平地に変えてしまったのであった。

「擲弾筒分隊、前へ——」

再び低い押し殺したような声が伝わる。私は分隊を中隊の最前線に誘導した。分隊に一番先に命令がくだったのは、重機関銃では射撃音をさぐられすぐに位置を発見されるためであろう。

「射撃は予行演習の通りだ。絶対に硬くなるな——」

と私は部下たちに叫んだが、私自身、心中静かに秒読みを始めても、刻々と心臓の鼓動で乱れを生じ、息苦しい有様であった。その時、前方ジャングルの黒い茂みのなかで何かが動いたような感じを受けた。

「目標四百米前方のジャングル中央！ 射てッ——」

四挺の擲弾筒が一斉に火を噴き、音を立てた。周囲の静寂は引き裂かれた。擲弾の弾道は緩かに弧

を描きながらとんでゆく。だが、闇夜にその軌跡は見るべくもない。南方は湿気が多く、そのために不発弾が多い。発射したあと弾着まで、われわれは、どうか敵陣で炸裂してくれと神に祈った。——次の瞬間、目標地点から次々に火の玉が揚った。命中である。耳をつんざくような轟音に私たちは踊りあがって喜んだ。目をやれば爆発するたびに、宙高くふつとび、あるいは横ざまに倒れる米兵たちの姿が見える。敵は連射する擲弾のために意外に甚大な被害を蒙ったらしい。第一線が慌てふためいている様子が、赤い炸裂火のなかに浮かびあがる。二十分もすると米軍の前線は大きく後退するにいたった。

「やったぞ。やった、やった——」

守備隊員たちは思わず同じ言葉を繰り返してほっと安堵した。擲弾筒とは片手で携行できる花火の筒のような兵器で、満州事変以来使用されているきわめて原始的な小迫撃砲である。筒の口径八センチ、筒の長さ二十センチ。最大射程距離六百五十米。弾量は一個一キロ弱である。筒の下部二十センチの部分に照準がついていて、その下に半円の台座がある。射撃の際は必ず左手で筒を支え、四十五度傾けて、右手で照準を定める。ふつう、射手のかたわらにもう一人の筒手がいて筒に弾丸を入れる役目を果していた。一発の弾丸の殺傷力は十五平方米におよび、小型ではあるが歩兵部隊には欠かせぬ重宝な火器であった。……だが、米軍はわれわれの攻撃に黙って退いたわけではなかった。やがて、そのジャングルの奥から数万発の一斉射撃が始まった。猛射は焰の束の如く、火の河となって怒濤のようにわれわれの頭上に注ぎ、炸裂する。愕く暇もなく、私の周囲には鮮血がとび散り次々に戦友たちは薙ぎ倒される。もはや、大地に額をつけたまま頭があげられない。誰が何処にいるのか、どうな